

第1回学びの多様化学校検討委員会 開催結果概要

●日 時 令和7年6月30日(月) 午後3時30分～

●会 場 釧路市交流プラザさいわい 3階大ホール

●参加委員 11名

●議 事

(1)「学びの多様化学校」について

(2) 意見交換

●質疑応答

(1)「学びの多様化学校」について

【スクールビジョン】

委員長：スクールビジョンについては、事務局から説明があったとおり、子どもたちにも分かりやすいビジョンということであった。示された5つのポイントを踏まえ、一つのスローガンのようなものを、他都市の事例のようにまとめていくことが望ましいと思う。また、教育課程にも反映されてくるものと考えている。

委員：ポイントの①から③は行ったらこういうことができるという現状で、④⑤は次のステップである。まなびやに来る子は、何をしたいかわからないし、この先自分がどう進むのかもわからない状況で通いはじめ、自信をつけて学校に戻っていく。このことを考えると2本立てで考えられないか。

委員：「自信を持つ」ということがキーワードになってくる。①から③で自信を持つことで、④⑤に結び付けていくものと考えている。

委員長：例示の由比ガ浜中学校は学校に焦点が当たっており、草潤中学校は生徒に焦点が当たったビジョンになっている。その点はどうか。

委員：今の形の学校ではだめで、違いを出すビジョンがいいと思う。子どもに寄り添うようなビジョンがいいのではないか。学校に対し一歩が踏み込めない生徒に対し、「いいんだよ」「大丈夫だよ」というメッセージが含まれているビジョンがいい。

委員長：学びの多様化学校ということで、学びたいと思ったときに環境を整えるといったことが大事な点である。学びたいと思う子どもたちの声を大事にすることが必要。

委員：基本的にはいいが、「楽しく」であるとか、子どもたちが通いたくなるようなことが具体的にあるとお父さんお母さんも通わせたいと思うのではないか。

委員：「～の学校」というよりは「ありのままの自分で学ぼう」の方が子どもたちにはいいと思う。しかし、先生たちで「ありのままの自分で学ぼう」を共有し、何かを組み立てることは非常に難しくなる。スクールビジョンは先生と子どもた

ちで共有する必要があるのでしょうか。例えば、スクールビジョンは「～の学校」というイメージであって、子どもたちにはこういう学校だよと示す2本立てではだめなのか。

委員：不登校は恋愛で例えると学校がふられた状態であると思っている。その離れた子どもたちに来てもらうということになる。学びたいと思う子はいると思うのでその子をターゲットにしていくわけだが、「ここだったら居れるかな」とかそのぐらいの感じなのではないかと思っている。

委員長：スクールビジョンについては、いろいろ意見をいただいた。岐阜市のような形で先生方にも共有していけるというものでも構わないし、分けた方が分かりやすいというものでも構わないので、事務局で案を提案していただき、検討するというところでよろしいか。

<了 承>

【教育課程】

委員長：スクールビジョンがあつての教育課程であると思うが、教育課程についても説明があつた。既存教科の時間を削減し、新設の教科を2つ作るということで、一つは、釧路市の魅力を生かした体験をする学びの中で、社会的自立を促し、自己肯定感を高め、共生社会を生き抜く力を身につける学習。二つ目がソーシャルスキルトレーニングとの説明であつた。もう少し具体的にどういったイメージの授業なのか説明いただきたい。

事務局：新設科目1については、委員長の説明のと通りの目的で、釧路にはたくさんの魅力があり、いろいろな体験ができる。既存の学校もいろいろな体験学習を行っている。具体的にどういった体験をしていくかについてはこれから決めていくが、不登校の生徒は人との関りが苦手で他人の意見を聞いて自分の意見を形成していくことが難しいと考えており、人との関りをたくさん持たせ、合意形成をしていく力を身につける授業にしていきたいと考えている。

新設科目2については、ソーシャルスキルトレーニングを行いながら、コミュニケーション能力や自己管理能力、具体的には自分の行動や感情を効果的に管理できる力を身につけていただきたいと考えている。その中で自己成長や自己実現を達成する能力も身につけてもらえるようにしたいと思っている。

具体的には次回以降の検討委員会で説明できればと考えている。

委員長：時数の話も出ており、釧路市では850時間としている。これについても、説明していただきたい。

事務局：釧路市では850時間を設定している。主要9教科はまんべんなく時数を確保している。これについては、各教科の基礎基本はしっかり学ばせたいということである。学びの多様化学校を卒業しても高校進学や就職し、これから

の社会を生き抜いていくための力を身につけていただくためである。道徳については、ゼロにしているが、これは新設教科2で補えるものである。この850時間でしっかりと子どもたちに学ばせることができると考えている。

委員：時数については、非常に練られていると感じたところである。私も委員の依頼を受けた時に手引きを読んだが、北海道は全国的に見ても時数が多い。その中で削減できるものは削減し、その先の進路はわからないわけであるから、主要な教科や音楽、美術などを残し、基本的な学力は身につけるといことは、子どもの将来を考えていると感じたところである。

委員：不登校にはいろいろなパターンの方がいる。その中で、生きていく力を身につけるということでは、昼夜逆転し通常の生活を送ることができない子どもが、こういった学校に行くことで、授業で学ぶことは当然であるが、生きる力、生活する術として朝起きて、ご飯を食べ、顔を洗って歯を磨くといった生活サイクルができるようになるのか聞いてみたいと思った。そういったことを組み込んでほしいということではなく、そういった子どもがいるということを頭に入れていただきたいと思い発言したところである。

委員長：学びの多様化学校の主役は子どもたちであるので、こういった子どもたちがここで生き生きと自分らしく生活できるのかという観点は非常に重要である。スクールビジョンとも関わってくるところであり、そういったことも踏まえた教育課程の編成にしていかなないと子どもたちにとって残念な学びの場になりかねない。

委員：新設教科1については素晴らしいと感じている。新設教科2については内容がわからない部分があるが、やはり気になるのは学びなおしができるのか、それとも得意の科目をどんどん前に進められるのかということである。得意不得意があり、長い間休んでいて自信を失っており、早い段階で躓きを乗り越えられたら次に進めるのに、学校はもっと先のことをやっているから、もうやりたくないと感じる子がたくさんいる。だから、時数よりも内容次第だと感じている。時数はすごく考えられていると思っているが、一人ひとりの差、得意不得意にどこまで対応できるのかがこの学校の特色になれば思っている。

委員：鎌倉市は芸術科目をゼロにしているが、釧路市は残していることが素晴らしいと思っている。学びに来る子どもたちの中には小学生から不登校になる子もいて、技術家庭もその子には大きな体験になる。そういったことをしっかり学べる機会を教科の中で保障するということはすごくいいことである。また、先ほど意見に出ていた学びなおしの場については、大きな課題と思っている。

委員長：学年ごとの作りをどうするのかは課題である。内容もそうだが、一人ひとりに対応するにはどのように柔軟に教育課程を編成していくのが重要である。

委員：登校時間を他の生徒と会わないように9時にするとのことだが、この時間は少し厳しいのではないかと感じている。保護者が送迎する場合は問題ないと思うが、バスで登校する場合、バス停で待っている時に校区の生徒が歩いていることが想定される。もう30分でも遅くなればよいと思った。

事務局：中央小学校の校舎を借りることから、なるべく中央小学校のチャイムに合わせて生活できないかと考え9時としたところである。また、9時登校にすると登校に使えるバスが3路線ある。バス停で待っている時間までは考えが至っていなかったため、もう一度検討する。

また、新設教科2の時間は中央小学校の休み時間25分と重なっており、毎日帯で設けている。ソーシャルトレーニングは毎日繰り返すことで効果的であると考え、子どもたちの相談にも毎日対応できると考えている。

これら諸々合わせて9時登校と決めたところである。

委員長：教室で学ぶことはもちろんだが、外に出て、体を動かし、人と交流して学ぶプログラムがあればよいと思う。

委員：今まで学校に通えなくてまなびやなどに通っていた子どもが、選択肢の一つとして自分の学校で学ぶことができる。そして、学校に入って勉強していくという捉えでいくと、ちょっとでも夢がある学校になればよいと思っている。

委員長：子どもたちは可能性を秘めており、地域にとっての宝である。この可能性を秘めた子どもたちにいろいろな人が関わり寄り添っていく内容が大事である。北海道は人口消滅都市というデータも出ており、北海道開発局なども積極的に地域を盛り上げていこうと取り組んでいるので、そういった協力も取り入れながら編成できればと考えている。

【学校名】

委員長：事務局案は何かあるか。

事務局：個別の名称案はないが、一つの学校としての名前を付けたいと考えている。

(2) 意見交換

委員：私のところへ来る子はほとんどが学校に通うことができない。ちょっと学校へ行ってみようと思っても、ちょっとでもイメージと違えば通えなくなる。学びの多様化学校の取り組みは進めていくべきものと考えるが、住み分けの表にもあるように、学校に行けない子が子ども家庭支援センターに位置付けされている。その子どもたちが、4になり3になり学校へ通えるようになるための体制が必要だと考える。多様化学校に重点を置いてしまうのではなく、その狭間にいる子の行き場所を並行して考える必要があるという感想を持ったところである。

委員長：貴重な意見である。学校という機関があって、それに対して不登校という単線である。もっと選択肢が広がっていろいろな学びの場が保障されると学びたいという意欲の灯を消さず、のびやかな成長が保障され则认为ている。

委員：今まで話を聞かせていただいて、この学校の対象となる生徒が状態3ということが分かった。学校に通えない子がたくさんいる中で、状態3の子に光を当てた取り組みということで、非常に素晴らしいと思う。こういった取り組みを行っていくかは、これから検討委員会で話し合っていかなければならないし、考えることもたくさんあると思うが、着手していただいたことは不登校を抱える家庭に光が当たったのではないかと思っている。

委員長：釧路市の中で子どもたちに手厚く支援をしていくということが皆さんに理解いただけたと思っている。